

3年子どもフィールド演習における実践と課題

Activities and Issues in the Class of Field Practice for Junior Students
in the Department of Child Science

池上 奨, 北川 節子, 高垣 展代, 谷中 優
Susumu Ikegami, Setsuko Kitagawa, Nobuyo Takagaki, Suguru Taninaka

〈要旨〉

人間科学部子ども学科では3年次子どもフィールド演習の取り組みとして「オープンピアッツァPlusキッズアートラボ in 芸術村」「地域の子育て支援の参加」「こどもの音楽文化」「音の風景（サウンドスケープ）の調査とまとめ」の4つを立ち上げた。それぞれ非常にユニークな取り組みであるが、共通する理念は地域や組織・団体の課題を体験的に学び活きた知見を深めること、さらにより主体的に人々と協働しながら問題の解決に貢献することである。これらの実践活動を演習ごとにまとめ、さらに学生の自己評価、教員の評価をもとにこの演習の成果と今後の課題を考察した。

〈キーワード〉

フィールド 演習 子ども

1 はじめに

人間科学部子ども学科とスポーツ学科は地域社会と連携し様々な人と交流する中で、地域や組織・団体の取り組みや課題を体験的に学び、生きた知見を深めることを重視している。3年次に実施するフィールド演習は2年次の経験を活かし、より主体的に人々と協働しながら問題の解決に貢献することを目的としている。さらにこの演習を通じて得た体験と、問題を整理し解決の方策を考える力は、4年次の専門ゼミナールの発展させる大事な基礎と位置付けている¹。

子どもフィールド演習は造形領域として「オープンピアッツァPlusキッズアートラボ in 芸術村」福祉領域として「地域の子育て支援の参加」音楽領域として「こどもの音楽文化」「音の風景（サウンドスケープ）の調査とまとめ」を立ち上げた。FD活動の1つとして取り組んでいたこと、さらにこの演習が新しい企画であり専門ゼミに移行する前の重要な取り組みであることから、4人の教員が1カ月に1回程度会議をもち様々な検討を行いながら運営してきた。検討の成果として①共通評価表と評価基準の作成②最終レポートの記述③成果発表会の開催、が挙げられる。これらは各演習の特色は保ちつつ、学習の成果を保証するために必要な方法であったと思われる。

また最後に各演習に対する評価を学生に行ってもらった。内容は、各演習の主な活動に対する感想・反省・意見、

演習の大きな目標である「主体的に人々と関係をもちともに働くこと」「問題の解決に貢献すること」に対する自己評価、さらにゼミの意義や今後のゼミ活動に対する提案である。提出は任意であったため提出しない学生もいた。学生評価は全員の意見を反映するものではなかったが、大切な評価材料となった。

子どもフィールド演習の実践を報告し、学生評価、担当教員の自己評価をまとめてこの演習の意義と課題を考察していきたい。

2 各演習の活動状況

2-1 オープンピアッツァPlusキッズアートラボ in 芸術村

この演習では、ピッツァ工房を校区の地域連帯を促進する要と位置づけ、そのシステム運用を学生が行うことによって、学校という自治体組織の特徴を知り今後の地域連帯のあり方を学ぶものである、という観点のうえで昨年度は「巨大こいのぼりをつくろう」「雨だカエルだ、ゲコゲコだ」「海をつくろう」「サンドアート」「祭だよ全員集合」「はんがDEねんが」の計6回のワークショップがオープンピアッツァで行われた。これは、金沢星稜大学の子ども学科にあるピアッツァ工房を近隣の幼稚園、小学校にその存在を知らしめるため行われたものであり、そして現在のカリキュラム上、学生たちが子どもたちと触れあう機会が少ないことを危惧した一部の教員の思いから始められたものである。

最初は毎月、後半は2ヶ月に一度というハイペースで行われた。初めての試みであったので、子どもたちが来てくれるかどうか心配された。しかし、各方面の皆様の協力を得て無事開催することができ、その後なんとか定着することができた。最初は戸惑っていた学生たちも場数を踏むことによりかなり鍛えられていった。しかしながら、じょじょに問題点も浮き彫りにされてきた。最初は小さな子向けでスタートしたのだがアンケートによる要望もあり、難易度を上げたことにより子どもたちの戸惑いと、学生たちの準備不足が指摘されるようになった。これらの問題点を抱えながら、今年度の子どもフィールド演習はスタートしたのである。

さて、今回のオープンピアッツアのテーマは稲置学園理事会の要請により、「ピアッツア工房の遊びの部屋の壁面が寂しい、こども学科らしい物が欲しい」との要請に答えたものである。こちらは今までとは一味違うものと考えていたのでかなりハードルが高いものになってしまった。サポート要員として、池上、永坂両基礎フィールドの2年生を配置することにより、万全をきたした。しかしながら、レリーフという概念を理解してもらわなければならないのでかなり学生たちを悩ませてしまった。そこで、3年生、2年生の池上、永坂両基礎フィールドからもプランを出してもらい一番面白いプランを採用することにした。そしてジグソーパズルというアイデアに行き着いた。これならワークショップ的にも面白く、造形的にも問題ないと考えられた。タイトル名も「ホワイトクリフ〜ペンキをもって巨大パズルに挑もう〜」に決まった。内容は「森の音楽隊のイメージ」である。そして学生たちの頑張りにより縦3.8メートル、横7.2メートルの巨大ジグソーパズルは無事完成させることが出来た。



平成21年6月パズル完成

しかし幾つかの問題点も浮き彫りにされた。まずはチームワーク。目標の認識、役割分担、協力態勢ができていな

かった。チームワークの基本は①コミュニケーションを密にする②約束、ルールを守る③責任逃れ、責任転換をしない④陰口を言わない⑤自我意識をおさえ、個人感情にこだわらない⑥人前で相手に恥をかかせない、などであるが守られていなかった。いずれにしても、自分本位な考え方を改め、相手の立場に立ってものを考えていくことがチームワークを高めるために重要であり、先生方の指示をよく理解し、報告、連絡、相談をまめに行うことが大事であった。この点を反省することにより次回につなげればよいと思われた。しかし彼らにあまり反省がみられなかった。このまま続けても子どもたちの管理ができず、事故につながる可能性があると考えられた。私も疲れてしまい彼らを指導するモチベーション失くしていたのも事実である。先生方と相談した結果、残念ながら3年生のフィールドとしてのオープンピアッツアはこの1回で打ち切ることにした。そして彼らにフィールドの解散を告げた。

その後、彼らはいろいろな疑問を胸に報告書を書くことになるわけだが3か月の冷却期間を置くことにより、かなり自分たちを客観的に見るできるようになったようだ。成功だけが学生たちの為になるとは限らない。このようなほろ苦い経験を積むことは社会人になるための前段階として良い経験だと思う。

そして完成年度までカリキュラムの内容を変えられないことも問題点のひとつに挙げられる。音楽・福祉・造形の3分野のフィールドを選ぶということは、興味がなくともどれかを選ばなければならない。「他に行きたくないから造形を選んだ」では自ずとモチベーションも上がらない。やる前から結果は分かっていたようなものだ。ただ今回、あまりにも規模が大きくなったため、「単独のフィールドで行うのには単位などの問題がある。」と指摘され今後はこども学科主催で子どもフィールドに委託という形に落ち着いた。なかなか難しいプランニングではあったが、学生、教員ともども大変勉強になった。関係者の皆さんの協力に感謝の気持ちでいっぱいである。

ちなみに、予定していたオープンピアッツアは前倒しで2年生に任せることにした。彼らは3年生の姿を反面教師と捉えコミュニケーションをしっかりとろうと考えたようだ。私も彼らに、頭の中にあるイメージをいかに上手くメンバーに伝え、形にするか何度も何度も、くどく、くり返して指導した。オープンピアッツアin流星祭！「おぼけ主催！？ハロウィンによろこそ☆・ピアッツアタウンをつくらう！「~してくれるかな？！あなたのおうちにサンタさん〜」と回を追うごとに彼らの成長が見てとれた。反省会においても特に1年生からの前向きな意見が多く今後に繋がる手ごたえを感じた。

私のフィールドの目的は多様なワークショップを通して

縦、横、斜めのなどいろいろな角度から意思の疎通をはかり人間関係を作ることである。彼らの頑張りにより今後、私のフィールドでは2年生の段階で「こどもフィールド」の企画・運営を任せることが可能であると証明できた。

(池上 奨)

2-2 地域の子育て支援の参加

金沢市は平成17年3月少子化対策推進行動計画として「かなざわ子育て夢プラン2005」を策定した。演習「地域の子育て支援の参加」は「かなざわ子育て夢プラン2005」の基本方針2「楽しくいきいきと子育てができる環境をつくる」のなかの「身近な地域における子育て支援機能の充実」にある「子育て夢ステーションの設置」事業に参加する企画である。この子育て夢ステーションは金沢市独自の事業であり、保育所、幼稚園、児童館を身近な子育て支援の拠点の場として、地域の妊産婦や乳幼児をもつ保護者が、気軽に育児の相談や育児講座の参加、友達づくりをおこなえる場所として設けられたものである。

演習では保育所で行われている子育て夢ステーションに参加し子育てサロンを企画・運営することを目的とした。関連した活動として「サロンの参加」「学内学習」「施設見学」を計画、さらに学生は保育体験が少ないので、希望に応じて「保育体験」を行った。参加学生は6人であった。

「サロンの参加」は毎週木曜日に開かれているサロンに2人ずつ参加し、未就園の1,2歳児と母親に関わった。学生は子どもとは遊ぶことはできるが、母親と会話をすることが難しく、参加回数は1人当たり3回程度ということもあり、消極的な活動に終わった。

「学内学習」は少子化社会の現状と対策の理解は「少子化社会白書」の割り当てられた範囲を要約し発表するという形式で行った。その他に、子どもの発達、家族問題、遊び、指導案の立て方等についてなど、多くの先生方から指導をいただいた。

「施設見学」は「カンガールーム内灘」「金沢市教育プラザ富樫」「城北児童会館」の3か所で行った。教育プラザ富樫では児童相談所や一時保護所など、子どもを守るための施設の重要性について考える貴重な機会となった。城北児童会館では親子の遊びの指導を見学し、具体的な方法を学ぶ機会となった。

「保育体験」は学生に子どもと接する豊かな経験をしてもらいたいと考え企画、学生の希望を聞きながら実施した。その結果、火曜日と木曜日の原則午前中に行うことになり、述べ19日間に3つの異年齢児の保育を体験することができた。サロンでは母親と話ができなくて苦戦していた学生も、保育体験では園児から「おねえちゃんせんせい」「おにいちゃんせんせい」と慕われ、子どもたちと良い関わりができ

たようである。毎回の活動記録には子どもの成長の姿や保育士の役割が書かれており貴重な体験となったことが窺える。

「サロンの企画・運営」は8月に2回、9月に2回計4回実施した。サロンの運営を計画し、最初から最後まで3人の学生が責任を持って行うことにした。企画は住民への周知の都合上、前年度に保育所と教員で既に決めていたのでそれにそって行った。1回目「園開放（プール遊び）」2回目「手遊び」3回目「おはなし会」4回目「パネルシアター・エプロンシアター」である。

まず学内においてサロンの「ねらい」「時間予定」「環境構成及び準備」「予想される親子の姿」「指導上の援助・留意点」を話し合っ指導案に記載、教員の点検・指導を受けた。それに基づいて、歌詞を模造紙に書く、遊具を作成するなどの準備と集団遊びの練習を行い、必要時教員の前でリハーサルを行った。

当日は環境整備など普段、演習では行わない活動から始まった。新型インフルエンザが流行していたことから手指消毒の指導を行ったり、駐車場の誘導が必要となったりしたが、学生は状況に応じて臨機応変に活動することができた。サロンの受付、集団遊びの誘導、説明、歌唱指導、ピアノ伴奏など、準備した成果を発揮することができた。音程を間違える、説明が理解しにくいなどの失敗もあったが、参加された母親の温かい見守りと担当する保育士の励ましでやり遂げることができた。毎回、担当保育士を交えて反省会を行い、学びを共有し専門家からの助言を得ることができた。



2回目「手遊び」平成21年8月

成果報告書として学生が選んだテーマは子育てサロンと保育体験で各々3名であった。演習の主な目的は子育てサロンの参加と実施であるが、学生の半数が保育体験をテーマに選んだということは、子育てサロンより保育体験に学生は興味をもったと考えられる。今後この演習を実施して

いくにあたっては、サロンの参加回数を増やし母親との会話ができるようにきめ細かく指導する必要があることが考えられた。

このように演習「地域の子育て支援の参加」では多くの経験をすることができ、学生それぞれに学ぶことは多かったようである。学生からはこの演習の意義として、小学校に入学する前の子どもたちの成長・発達の様子が理解できたこと、子どもの目線で考えられたこと、企画を担当し責任をもって共に働くということと仕事への意欲がもてたこと、子どもだけでなく親と関わる経験ができたこと、さらに自分自身が変わらなければならないことや克服しなければならないことを新たに発見できたことなどが挙げられていた。

(北川節子)

2-3 こどもの音楽文化

「こどもの音楽文化」は2年次フィールド基礎演習「こどもと音楽で関わろう！ ～金沢ジュニアオペラスクール～」から引き続いての活動からスタートした。1年間の金沢ジュニアオペラスクール支援では、こどもと一緒に練習に参加したり、休憩時間に遊んだり、話し相手になったりしながら様々な関わり方を体験した。この活動を通して「こどもに話をするとき、同じ目線で話をするとよく聞いてくれて会話ができるようになる」「名前を呼ぶことで信頼関係を築くことができ、こどもから話しかけてくれる」「その場の様子だけでこどもを判断するのではなく、その子の背景にある事柄にも心を配る」など、こども理解を少しずつ深めることができたようである。今年度は金沢ジュニアオペラスクールの本公演「終わらない夏の王国」が8月22日(土)に行われた。学生は本公演に向けて、こどもの練習の支援、当日の裏方参加がすでに決定していた。

総合芸術としてのオペラを練習から参加体験し、保護者の方々の小道具制作や衣装作りを見てきた学生から「私たちもオリジナルなオペラを作ろう！」と話が持ち上がった。オペラでは大掛かりなので、小学校や幼稚園で演じられるオペレッタに話し合いで決定した。オペレッタにはこどもに関わるいろいろな要素がある。環境設定を考えること、大道具・小道具の造形、衣裳の制作、台本の創作、音楽や舞台での表現など、人々と協力しながら完成を目指す人間関係など、こどもと関わる仕事につく学生にとって学びになると考えられた。[より主体的に人々と協働しながら問題の解決に貢献する]というフィールドの目標にも近づくと考えられた。昨年はこどもとの関わり方の体験を経験できたので、今年度の目標をこどもに何かを見せて、何かを伝えることに方向転換させたらよいことに自ら気づいてくれたのである。

フィールド創作オペレッタは「赤ずきん」を基本に創作した「なないろずきん」に決定した。登場人物はフィールド参加の3年生6人全員が舞台に立てるようにと、なないろちゃんとお母さんの2人、うさぎ・くま・あひる・ハムスターの4匹に決定した。また、「かくれんぼ」をする場面で、ペープサートを導入することにした。二つの文化財を融合することで表現方法が広がることと、歌詞だけで上手く幼児に内容を伝えられるか不安があったためである。話の内容が決定するまでは全員で話し合っていたが、その後は自主的に役割を決めて、大道具・小道具を作る者、台詞を考える者と分かれて作業に入った。音楽はすべてオリジナル曲にするのではなく、既成の曲にオリジナルの歌詞を当てはめることにした。その場合はオリジナル曲のイメージを壊さないように注意した。



平成21年8月 聖ヨゼフ幼稚園

「オペレッタ公演」は星稜幼稚園・星稜泉野幼稚園・聖ヨゼフ幼稚園の3つの幼稚園と他フィールド主催のオープンピアツァに参加して披露することの4公演を行った。幼稚園公演は事前に舞台を見学しなかったために、当日いろいろな対応が要求された。星稜泉野幼稚園では舞台が狭く、丸いせり出しに2段の階段が全面にあった。天井も低く、夜の場面で月を上げる空間がなかった。舞台前も演技する場所として確保し、階段を上下しながら演技した。聖ヨゼフ幼稚園では舞台が高く、園児が床に座って見ると首が疲れると考えられた。幸いホールが広がったので舞台を使用せず、客席と同じ床で演技をした。星稜幼稚園では舞台は星稜泉野幼稚園より広がったがそれでも十分ではなかったので、舞台前も演技する場所として確保した。ところが舞台へ上がる階段が舞台の両側に2か所あるだけだったので、そこからの移動になった。この様に会場によって臨機応変な対応を要求されたが、学生は不安を顔に出さず堂々と演技をした。オープンピアツァは大学内の開催だったので、場所の不安は無かったが、実習等で参加できない学

生がいたため、配役を入れ替えなければならなかった。台詞も動きも皆で作りに上げてきたものだったので、配役変更もスムーズに対応ができた。

オペレッタ創作・上演を体験することで、学生は様々なことを学んだ。「こどもが大好きになった・自然体で関わられるようになった・いつでも笑顔で余裕を持って活動すること・他人を頼らず自ら積極的に行動すること・手作りの物との関わりから創造性や豊かな感性を育てたい」など、こどもに対する考え方や対応の仕方、自分自身の変化について気づきがあったようである。また、今後の課題として「全員で1つのことを成し遂げる難しさ・皆で問題の解決策を見つけ出すこと・周りの意見を聞くこと・日々の準備やきちんとした計画性・協力すること・広い視野を持つこと」などをあげている。こどもに関わる仕事に就きたいと考えている学生は、もう一度自分自身を見直す機会になったようであり、こどもを相手にすることは簡単なことではないが、重要で意義のあることだと本気で考える機会になったようであった。

(高垣展代)

2-4 音の風景 (サウンドスケープ)の調査とまとめ

サウンドスケープについての学習や音環境の調査、またそれらを基にしたこどもとのふれあいを通して、音の環境がこどもに与える影響について考察したり、教育現場への応用や活用について学習し実践することにより、音・音楽を媒体とした教育活動の方法を身に付け、こども理解につなげる。

言い換えれば、サウンドスケープの概念に基づく教育活動が子どもの成長発達に重要であることから、そういった活動の場を設定し運営することも含め、活動を通してその理論と教育方法を理解し、実践に生かせる能力を育てる。

教育における「サウンドスケープ」は、環境教育の観点から、音の環境を意識・認識することから始まる。音の環境を意識・認識することで、音とは何か、音と自分、音と集団といった音の本質や対人的な関係性を、意識的あるいは無意識的に把握することにある。そういったことを基にして、様々な音・音楽への体感や理解への道筋となる「サウンドスケープ」は、ここでは方法論の一つとして機能する。

「音楽教育における方法論の一つ」であるということは、方法論は他にも存在するということであり、それらの方法論は「豊かな感性を育む創造的な音楽教育」に集約される。創造的で感性豊かな子どもたちの育成が目標として存在し、それは結局「生きる力」へとつながっていくことになる。

そういったことを踏まえ、本こどもフィールドでは当初、地域の音環境を調査し、サウンド・ハンティングをもとに音の地図を作るなどサウンドスケープを体験した後理論に進み、並行してこどもとのふれあいを設定して、それらをより深化させていく計画であった。

しかし時間的な問題や学生の実態（はやくこどもとふれあいたいとの希望＝しかしこれは当然の願いである）から、まずそれを優先させることになった。現場はいくつか候補があったが、結果的に星稜泉野幼稚園、小坂小学校、芳育児童館の三ヶ所に落ち着いた。

ここでフィールド演習における現場での視点を次のようにまとめてみた。

- こどもの様子（実態）を把握する
- 指導者の指導法を学ぶ
- 音・音響＝サウンドスケープとこどもの関係を見る
- そこで自分ができることを考え実践する・・・まずこどもとの積極的なふれあい

さて予定していたが実施できなかったものに、こどもを対象としたイベントがある。計画の原案はできたが細案がまとまらず、そのうち時間切れとなってしまった。

当初提出された企画書は、企画の概略、あるいは骨子にすぎず、部分的に細案があるものの全体として実施不可能といった内容で、自分たちなりに考えたものであったと思うが不完全なものであった。

ただし本演習の最後に、個人的には数人が自主的に計画書を新たに提出している。例えば「音の地図づくり」や「手作り楽器づくり」などがそれである。当初の提出内容よりも数段レベルアップしているものである。それらは少し手を加えれば実施可能なもので、格段の進歩がみられた。

サウンドスケープの概念を基にした教材や教育の方法論は、前述した「音の地図づくり」や「手作り楽器づくり」だけでなく、例えば多様な音のゲームや創作表現活動にもみられるが、ここでは一般的で自分たちに可能なものを題材としていることは評価できる。

フィールド活動の当初、メンバーの多くは自主的に動けず、レポートについても内容や書き方の点など憂慮したが、回を重ねる毎に（時間とともに）、徐々にそれらは解消されていった。デスク・ワークとフィールド・ワークのバランスとその積み重ねから、それぞれが理解への道を歩み始めていることを私は実感する。

彼らはこれらの活動から何を学んだか。詳細はまとめのレポート集を参照頂きたいが、当人（4名）の個々のレポートが、個々に何を学んだか、学び取ったかを如実に物語っているだろう。そこに彼らの成長を見ることができるとは喜ばしいことである。



手作り楽器づくりの一コマ「芳斉児童館こどもまつり」
H21.8

指導の立場から一言。学生からも出たことであるが、子どもイベントの企画については、一つでも実施できれば良かったと思っている。但し「時間切れ」と既述したように、実施場所の相手側の都合もあり、企画書の提出が大幅に遅れたことで文字通り「時間切れ」で実施不可能になってしまったのは残念である。

また、年度当初に全ての活動計画が決定していたわけではなく、ある部分では協力団体との調整に手間取ったこともあって直前にならなければ詳細が分からないといった場面もあり、逆に学生のスケジュール調整と合わなかったりなど問題点が残った。次年度はそういった点をクリアーにしていきたいと考える。

最後に本フィールドを体感した学生諸君へのメッセージを次に。「体験から得られるものは大きい。人間は人やものに能動的に関わることで、パラドックスに人やものから与えられ成長してきたからである。願わくは、これからも一步一步前進して行ってほしい。自分のペースで。」

末筆ながらご理解ご協力頂いた方々に心からの感謝の意を表したい。

(谷中 優)

2-5 成果発表会

子どもフィールド演習では各演習で学習した内容を一人ひとりがレポートとしてまとめ、発表することを課題とした。意義は①子どもフィールド演習における経験と知識を統合し深める②レポートの書き方の基本を身につける、である。「レポートの構成」と「文章の書き方」についての資料を渡し、各先生の指導を2回以上受けること、字数は3,000字以上と指導した。学生全員が提出し各教員の「まえがき」と合わせて72ページの集録にまとめることができた。

11月21日(土)午前中に成果発表会を開催、自分のレポートを発表する機会を設けた。当日富山県で開催された就職説明会に出席を希望する学生6名が欠席した。スケジュール管理の不足と、学生への指導の徹底不足を反省させられた。

発表会には学部長をはじめ14名の教員が参加した。発表内容や考察から学生個々の演習の取り組みの姿勢がよくわかり、成長の差異が明らかになった。学生は緊張感を持って発表したが、発表準備不足の指摘を多くの先生方から受け今後の課題となった。

3 評価と今後の課題

3-1 学生評価の分析

フィールド演習終了後に、この演習に対する評価・意見を学生から聞くために自由記述のアンケートを行ったところ22名中16名から回答があった。これらをもとに演習の目標と意義について学生の評価を分析した。

1)目標:「主体的に人々と協働する」

【学生の意見】

- ・仲間と協力し合うことが大切
- ・様々な人と関係を持つと心構えが身に付いた
- ・多くの人の協力が必要だと気付いた
- ・協調性が身に付いた
- ・周りの意見に耳をかたむけ、活動するようになった
- ・自分から主体的に行動がとれるようになった
- ・自分からコミュニケーションが取れるようになった
- ・自ら行動し、ともに働くことの一体感や関係がよくなっていくことがとてもうれしいと思うようになった
- ・自ら積極的に行動すること
- ・1人で悩むより人と共有し合って協働することが大切だと思った
- ・保育士と一緒に働くことが楽しいことを知った
- ・自然体で関われるようになった
- ・わからないことは聞き、素直に聞き入れることで人との関わりを深めることができる
- ・よりよい解決のために話し合いをした
- ・全員で作業を行うことによりコミュニケーションが向上した
- ・協調性や向上心、積極性が増し成長した

演習を通して目標の1つである「主体的に人々と協働する」について、学生自身がどのように変化したと思ったかを聞いた。その結果、多くの意見が寄せられた。

まず学生同士で話し合い、意見に耳を傾け協力し合う必要性に気付き、協調性が身に付いたと述べている。さらに

自分から積極的・主体的に行動できるようになった、コミュニケーション能力が向上し、ともに働く大切さに気付き、一体感がうれしいと感じるようになったとも述べている。このようにグループで1つのことに取り組み成果を出す過程で主体的に協働することが学習できたと考えられる。

地域の人々と関り協働するという点については、一緒に働くことが楽しいと思えるようになった、素直に聞き入れて関わりを深めるという意見があった。大学組織外の人と関わることはあるが、まだまだ主体的に協働することは難しいようである。

このように演習グループの学生同士で協力し合い積極的に活動することはできるが、地域の人々と協働することはまだまだ困難なことが窺えた。

2) 目標：「問題の解決に貢献する」

【学生の意見】

- ・以前に比べると問題解決の意識が高まった
- ・自分は何をすべきなのか、何を求めているのかについて考えるようになった
- ・自分は何をすべきかを考えながら行動した
- ・仲間とのよりよい解決のために話し合いをする
- ・問題解決ではないが、話を聞いてあげただけでもその人にとって良いことなのではないかと思った
- ・子ども同士のトラブルの解決ができるようになった

もう一つの目標である「問題の解決に貢献する」に関する意見は少なかった。

演習をとおして問題解決の意識が高まった、自分は何をすべきか考えるようになったなど問題解決への意識や、解決のための話し合いなど学生同士の問題解決に貢献したという意見があった。地域での問題解決については、話を聞く、子ども同士のトラブルを解決するという意見があった。

このように問題解決に関する意見が少ないということは、この目標は学生にとってレベルが高い目標ではないかと考えられる。グループ活動ではトラブルはつきものである、学生もお互いに調整しながら何らかの形で解決していく。その過程を経験しながらも、それについて自分は貢献したと思えるためには何らかの示唆が必要だろう。また地域に出て問題が生じたとき、学生自身が問題解決をする場面をつくることは難しく、問題が生じないように教員が適宜指導を行っているのが現状である。問題が生じたとき学生自身に解決の機会を与えるためには、施設・地域との信頼関係と緊密な連絡が必要となる。

3) ゼミ活動の意義

【学生の意見】

- ・音に対してゼミ活動を通して学ぶことができた
- ・音に対しての意識を高めることができた (2人)
- ・小学校に入学する前の子どもの様子や、成長・発達の様子を知ることができた
- ・子どもの様子をよく観察することができた
- ・子どもの目線で考えることができた
- ・子どもが好きになった
- ・子どもに関わろうとする自分自身について考え、見つめ直したり、知ることができた
- ・子どもとかかわる経験 (3人)
- ・親と子と一緒に接することができた
- ・親にかかわる時間があり貴重な経験だった
- ・保育所の現状を経験することができた
- ・保護者の不安を取り除いてあげられるような対応ができる人が望ましいと思った
- ・自分たちが楽しみ、本気で演じることの大切さ
- ・楽しみながら協力して行うこと
- ・取り組むことの難しさや、作品が出来上がった時の喜びを感じた
- ・全員で物事を行う難しさを経験
- ・ゼミ生の仲が深まり絆を感じた
- ・日々の準備やきちんとした計画が必要だということ
- ・自分で考えて計画、実行できたこと
- ・臨機応変に対応できるよう心がけることができた
- ・責任を持って共に働くという仕事への意欲になった
- ・堂々と行動できるようになり自信がついた
- ・社会に対して行動する力をつけることができた
- ・自分が変わらなければいけないところ、克服しなければいけないところを新たに発見することができた

演習の意義については実際の経験に伴ったものが多くみられた。音に対する関心、子どもと接する経験、子どもの観察、子どもへの意識の変化、親と接する経験、保育所の現状把握、演習についての基本的な心構え等である。また演習を通してグループ活動の大切さに気付く、計画して実行することに重要性に気付いたなどがあった。

さらに学生自身が演習を通して仕事への意欲をもち行動力が身に付き、自分自身を振り返ることができたとの意見もあり、社会人としての心構えをつくる機会となっていることが分かる。

3-2 評価と今後の課題

演習の現状と学生の意見から、演習を評価し今後の課題を考察した。

まず目標「主体的に人々と協働する」については、大半の学生は到達していたと考えられた。演習の目標達成のために話し合い、協力して取り組む過程を経験できたことが目標達成につながった。しかし、これらの活動の基本となるコミュニケーション能力が不足し、報告・連絡・相談などの配慮が不足していたためこの目標に達し得なかった学生がいたことも事実である。また外部組織におもむいた時、どのようにふるまうべきか戸惑い不適切な言動をとった学生もいた。

演習仲間同士でも基本的なコミュニケーション能力が不足している場合、演習自体が立ち行かなくなることがある。また大学組織内で演習仲間同士なら許される行為であっても、外部組織と関係をもち行動する場合は問題行動となる場合がある。コミュニケーション能力は2年次までには基本的な知識と能力が身につけている必要があり、これがないと外部組織との連携に問題が生じる場合がある。外部組織の人への不適切なふるまい方は経験不足から来るものでもあり、場面を通して丁寧に指導をする必要を感じた。

目標「問題の解決に貢献する」は学生の自己評価での記述は少ないことから、学生は目標達成ができていないと考えていることが分かる。しかし身近な問題解決は日々行っていることであり、それを考えれば達成していると考えられる。

たとえば「こどもの音楽文化」では4回の公演会場の条件がすべて異なっており、さらに公演直前に現場に行き行って判明するという状況であった。このような状況であっても、学生は落ち着いて舞台装置の配置、演技者の動きを条件に応じて臨機応変に決め、堂々と演技して公演を成功させた。これは十分問題の解決になっていると考えられる。

また「地域の子育て支援の参加」では親子に対してイベントを計画しても、だれがサロンに参加するかは当日しかわからず、人数や年齢に応じた動きは親子の様子をうかがいながら臨機応変に対応せざるを得なかった。その現場でのその時の対応は問題の解決の能力につながるものであろう。また母親との話の中から、母親が抱えている問題の解

決はできないが話を聞くだけでも良いと考えられたことや子ども同士のトラブルを解決できたということは、非常に大きな経験となっていると考えられる。

この演習の目標は、外部組織との関係の中で生じる問題を解決する意図があったと思われるが、それには及ばなかったのが現状である。この目標達成のためには先にも述べたように多少の問題が生じて、学生の成長のために許容できるおおらかさと教育的指導の配慮を、関係する施設・組織との信頼関係の中で培う必要があるだろう。

外部組織とつながりを持って演習を行うことの意義は、学内だけでは味わえない緊張感を伴った活動ができること、責任ある行動の必要性が理解でき身につけること、学内では体験できない様々な実践的な能力を身につけることができること、職業の意識が芽生えること、自己を振り返ることができることなどあると考えられる。今回の演習はまだ学内での活動が中心となり、教員の指導と配慮の中で学外演習を行ってきたという反省が残る。学生がより主体的に外部組織の人々と協働しながら、その中で問題解決を図るためには、今後も緊密に地域との関係期間と連携を図る必要がある。

4 まとめ

こどもフィールド演習は学内のゼミ活動ではなく、一般に行われる実習でもない地域の組織・団体と協働する特色ある演習活動である。指導する教員の経験、能力、人間性にも大きく左右されるものでもある。次年度はさらにもう1つ加わり5つの演習が行われる予定である。今後もこの演習が学生の豊かな経験の場となり、さらに社会人としての基礎力が養われる貴重な機会とするために、検討しながら進めていく必要を感じている。

注

- i 2009年度人間科学部3年次「スポーツフィールド実習こどもフィールド演習募集要項」